

ルクレチウスの翻訳によせて

板倉聖宣

私は教育などの研究はやってはいますが、もともとやばたい職人的人間で、いわゆる文化的な素養の全くない人間です。「文学とか芸術とかいったものも全く分らない」人間なのです。ですから、少しでも文化人らしい人々を見ると、付き合うのがおっくうで、すぐに逃げ出したくなります。そこで、私とそういう人々との付き合いは全くといていいほどありません。

しかし、なぜか国分一太郎さんとは少し交渉がありました。私は、科学読物を書いています、児童文学といったものはもちろん、大人向きの小説類もまったく読まない人間です。心が狭いのでしょうか。科学的な法則を求め、人々に役立つものを作っていくことのほうにばかり心がひかれるのです。

それなのに、私のほうから国分一太郎さんをお願いして、ルクレチウスの『宇宙を作るものアトム』という詩を大胆な

現代語訳にして頂いたのです。いま、出版されたその本の初版の奥付を見ると、「一九六五（昭和四〇）年三月二五日発行」となっていますから、それより一年ほど前のことだと思えます。

その企画は私自身が立てたものでした。その少し前、私と道家達将さん・大沼正則さんとで『朝日新聞』の日曜版に連載した「道を開いた人々」という発明発見物語集をもとにして、国土社から『発明発見物語全集』全一〇巻を出す話が進んだとき、私は、「『少年少女科学名著全集』といったものも出してもらえないだろうか」と話を持ちこんで、二つの企画を同時進行させていたのです。

文学には、昔から「名作物」といったものがあって、親が読んだ本を子に伝えることがあります。ところが、科学読物の場合は、いつも新しく書きおろされたものを与えることは

かりが考えられていて、名著・名作というものの存在が認められていませんでした。そこで、私は自分で科学読物を書く前に、〈科学読物にも名著として読み継ぐに値するものがある〉ということを示しておきたかったです。

私は、その『少年少女科学名著全集』の一冊として、「ルクレチウスの『物とその本性について』という雄大な詩と、二〇世紀のイギリスの物理学者のH・ブラッグの書いた『物とその本性について』という本を一冊にまとめて出す」ということを計画しました。ブラッグの本はルクレチウスの原子論の詩の話から始まっていて、意図的にルクレチウスの本と同じ題になっていることもあって、両者を一つに纏めて置きたかったのです。

ルクレチウスの詩は、その数年前に日本語に訳されたものが二種類ありました。しかし、その訳文はラテン語原文あるいは英語訳の内容に忠実に訳そうとしたせいか、折角の詩の形が生きていないのが残念でした。そこで、ごく一部分だけですすが自分なりにリズムミカルに訳してみたいこともあるのですが、全体を訳すとすると私なぞの手には負えません。そこで私は、「誰か、この雄大な詩を日本語の詩として通用するような文章に訳し直して、現代の子どもたちにもっとも強く訴えるような文章にして貰えないだろうか」と思いました。そのとき、国分さんの名を挙げてくれたのは、当時国土社に

いた竹内三郎さんだったと思いますが、私はすぐにそれに賛成しました。児童文学といったものを読んだことのない私も、国分さんの名は知っていて、「このひと面白そうな人だな」と思ったことがあるからです。

「国分さんは忙しくてやって下さらないのではないか」と心配でしたが、幸いその頃は仕事がなかったとかで、引き受けて戴けることになりました。そこで、ルクレチウスの原子論の詩の意義とそれを日本語の詩の形にすることの意義を説明するために、はじめて国分さんにお会いすることになりました。初めて会う国分さんはとても感じのいい人で、「この人ならきつといい詩にしてくれるだろう」と期待しました。日本語訳の本を二冊渡して、「よく分からないところがあつたら私が責任をもってラテン語版や英語版を照合するから大胆に意訳してほしい」とお願いしたのでした。

ところが、それから大分たつてから、国土社を通じて、「このルクレチウスの詩の本身は間違っているのではないか。そんなものをそのままにして置いていいのか。書き直すとしたら知識が足りないし」といった話が伝えられました。文学者の国分さんは、「科学の本というのは間違つたことを書いてはいけなものだ」と心配していたのでした。そこで、早速またお会いして、「科学というのは大胆な空想から始まるものであること。特に目に見えない原子のことを研究する

には大胆な空想が必要で、大筋が正しければ、いくらでも間違っているもよいこと」を説明しました。国分さんはなかなか納得できないようでしたが、「国分さんにとって面白くない空想はともかく、国分さんやいまの子どもたちにとっても面白い空想はたとえ間違っているもぜひ取り上げてほしいのです」と力説して、作業を進めて戴くことにしました。

それで、あの『宇宙をつくるものアトム』の詩が出来あがったのです。最初は、「もしかすると内容的な面で私を手を加える必要が出てくるかもしれない」と思いましたが、その心配は全く無用でした。あの文章には私の手は全く入っていません。

ルクレチウスの詩を訳して戴いた後に、もう一度だけ国分さんにお会いしたことがあります。今度は国分さんの申し出だったと思いますが、「仮説実験授業を見たい」というので、和光小学校の平林浩さんの授業を見に同行したのです。その授業を見たあと、国分さんは「子どもたちは間違った議論をしていたように思うが、あんなときには教師が指導して討論の方向を変えさせなくていいのか」と質問されました。じつは少し前、雑誌『教育』主催で成城小学校での仮説実験授業を見せたときにも、斉藤喜博さんから同じ趣旨のことを高飛車に言われたことがあります。その時も今度も、私は、「子どもたち自身が気づくほど脇道に入った討論になってしまっ

たときには教師が介入するにしても、子どもたち自身が問題点だと思ふことは何でも討論させるのがいいので、教師が〈ここではこれが問題点だ〉などと言わないのが大切なのです。いい問題群が準備されていれば自由に討論しているうちに自分たち自身で何がもつとも本質的な問題点か、真理を発見できるようにするのがです」と答えました。すると、国分さんから、「いやー、君たちは芸術家なんだねえ」と大変感心されたことを覚えています。そこで私のほうも、「斉藤喜博さんよりも国分さんのほうがずっと柔軟な頭をしているな」と思ったものです。

私には芸術のことはあまり分かりませんが、芸術家は科学というものをやたら芸術と対立するものと見て、かたぐるしく考えているようです。国分さんとの接触はそういうことを私に知らせてくれました。そして、「〈科学もまた研究の道程では芸術と同じくらい自由奔放でなければならない〉ということ国分さんに伝えることが出来たことはよかつたなあ」と思っています。国分さんのように影響力の大きい人が科学を誤解するかどうかということは重大な結果をもたらす兼ねないからです。

(仮説実験授業研究会代表)

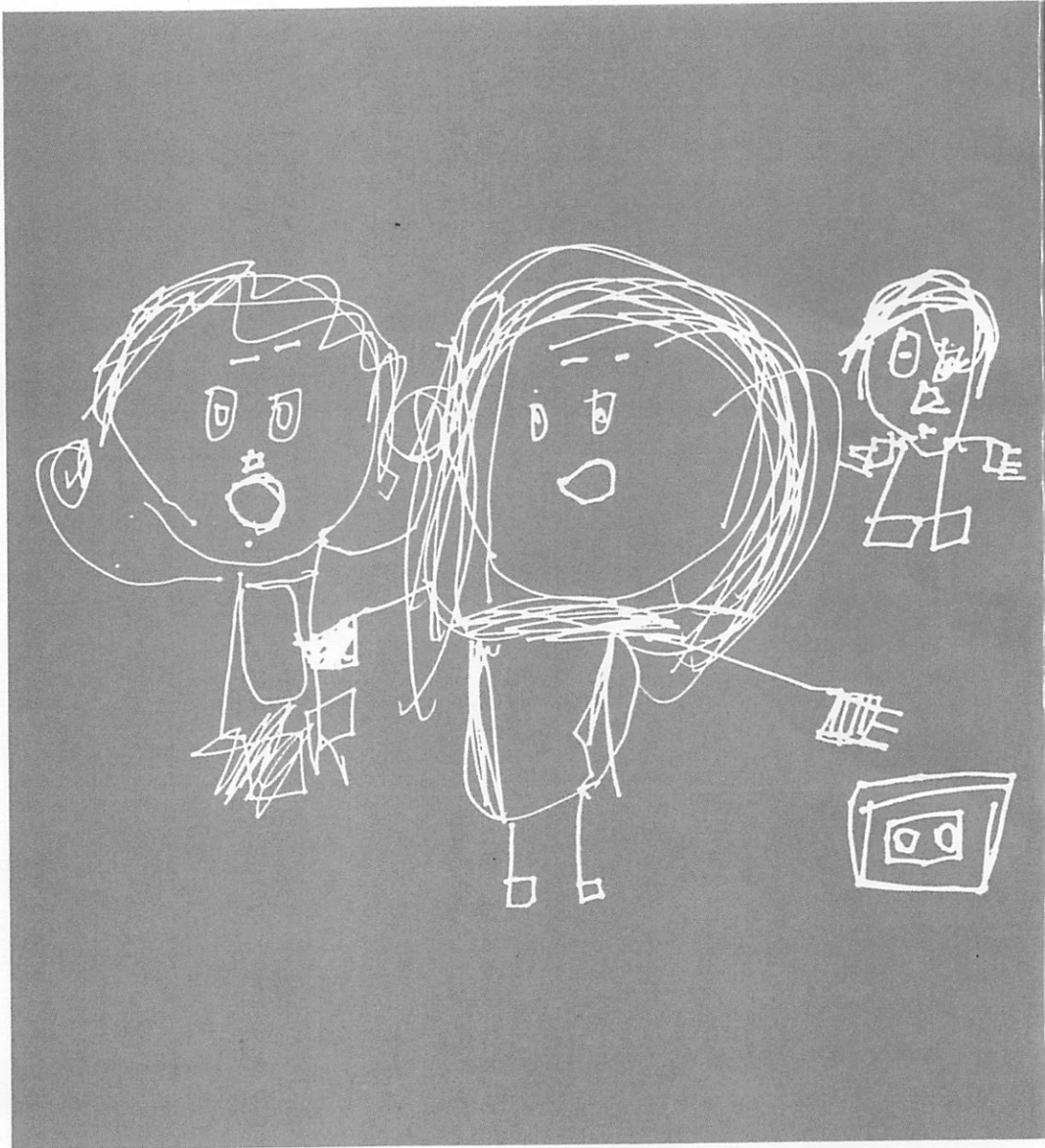
特集

父母と教師と障害児をむすぶ

人権と教育 ⑥

1987.6

自閉が見えてくる



私が選んだ統合教育だから——小島直子+殿岡翼

自閉・本質と諸相——柴崎律・近藤原理ほか

戦争と転向と抵抗と——栗原幸夫・津田道夫ほか